

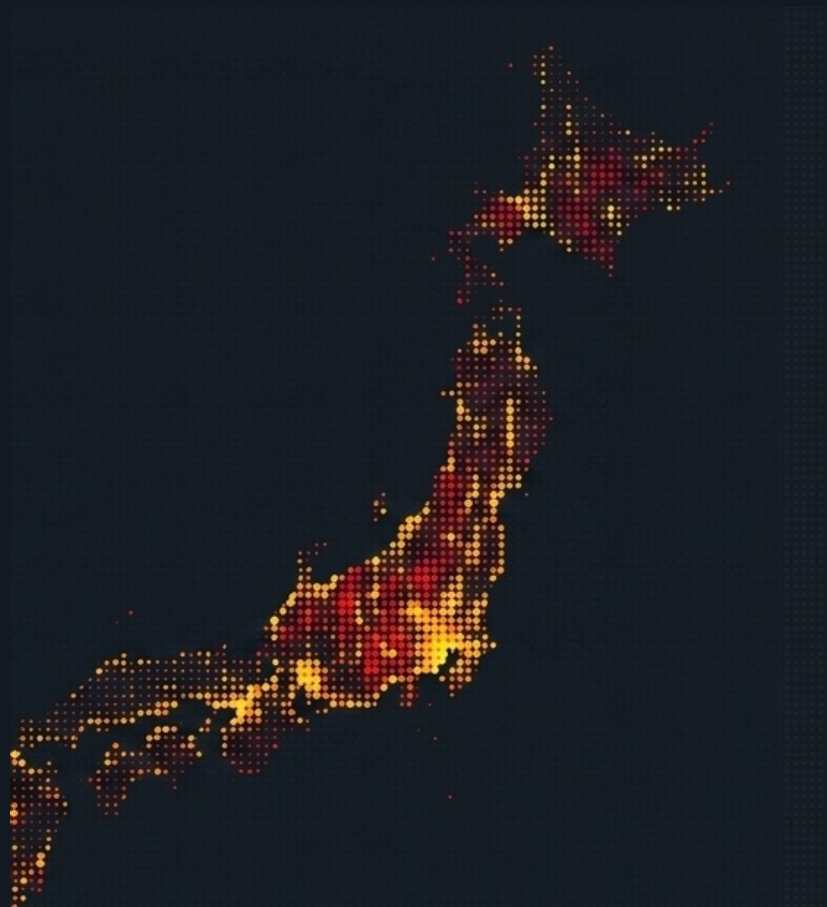
獣医工学ラボ（リサーチコーディネート株式会社）

分析例

KumaWatch データ分析レポート 2026

クマ出没の空間動態と秋季ピークに向けたリスク予測

自社データ 78,029件に基づく分析 | 2026年7月26日更新



01 出没の年間リズム：「10月の壁」

全期間・全エリアの出没のうち23%が10月に集中する。7月時点の出没水準は、ピーク時の6割程度にとどまる。

※月別分布は概形

17,588件



年間総データ

78,029件

10月の出没件数

17,588件（年間の23%）

時空間動態

10月前後にヒートマップが一気に濃くなり、
、人里側へ急速に広がる

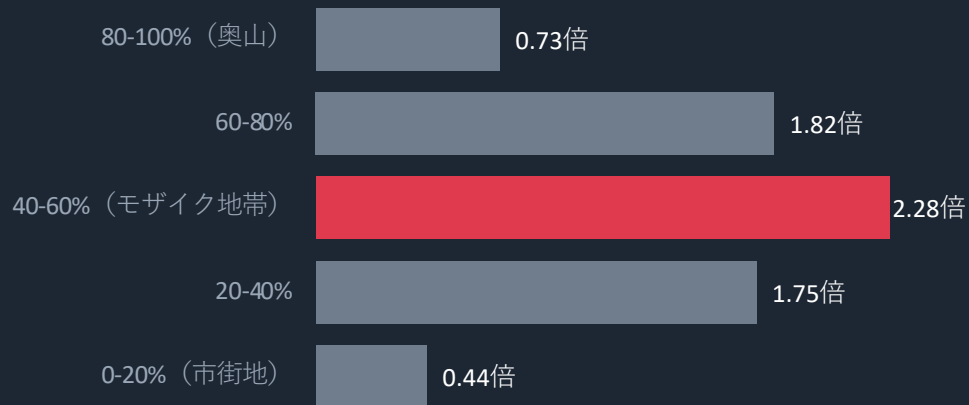
示唆

対策リソースは年間均等ではなく、9月までに10月ピークへ向けて集中配分するのが合理的。

02 空間分析：危険は奥山ではなく「境界」に潜む

守るべきは奥山でも市街地でもなく、その境界である。緩衝帯の整備や藪の刈り払い、森林率40～60%の「モザイク地帯」に集中投資すべき。

森林率帯別の出沒リスク倍率（出沒シェア÷国土シェア）



最重要投資エリア

森林率 40～60%

2.28倍

出沒シェア19% / 国土シェア9%

奥山（森林率80%以上）は国土の40%を占めるが、出沒は29%にとどまり、倍率は0.73倍。

示唆 リスクは森林と人里が入り混じる境界帯に偏在する。緩衝帯整備・藪刈りはモザイク地帯に集中投資すべき。

03 「秋型」出沒のメカニズム：居住圏への接近

「秋型」の年は単に出没件数が増えるだけではない。クマが人の生活圏に大きく近づく「質的变化」を意味する。

夏型 (Summer Type)



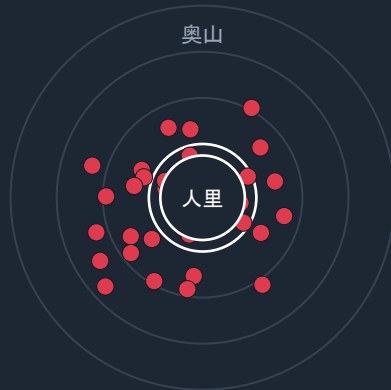
50.6%

秋型の年（2019・2023・2025）
発生場所の平均森林率

56.5%

夏型の年の平均森林率

秋型 (Autumn Type)



38.4%

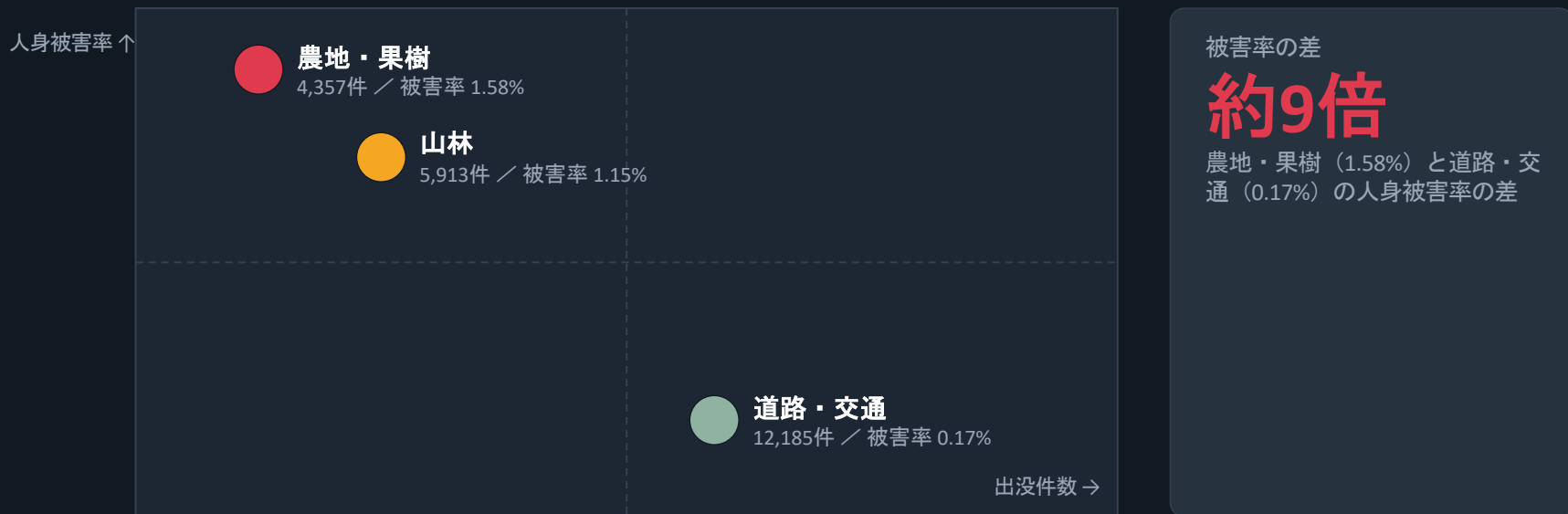
2025年（直近の秋型）
森林率40%未満（人里寄り）での発生割合

示唆

秋型の年は出沒の重心が人里側へ移動する。件数だけでなく「どこで起きるか」を監視指標に加える必要がある。

04 出没件数 ≠ 危険度（リスク比較マトリクス）

出没件数が最も多い場所を避けても、危険を避けたことにはならない。人身被害リスクは農地と山林に偏在している。

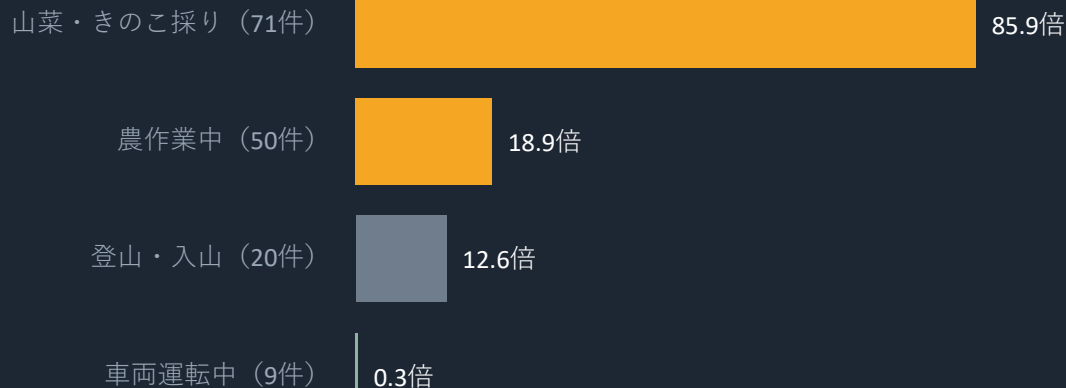


示唆

道路での遭遇の多くは車内からの目撃。認知件数に惑わされず、実被害リスクの高い「農地」の警戒レベルを引き上げる必要がある。

05 人身被害のコンテキスト：行動別リスク倍率

遭遇時の人間の行動によって、被害確率は大きく変動する（平均リスク＝1.0倍）。



山菜・きのこ採り

85.9倍



農作業中

18.9倍



登山・入山

12.6倍



車両運転中

0.3倍

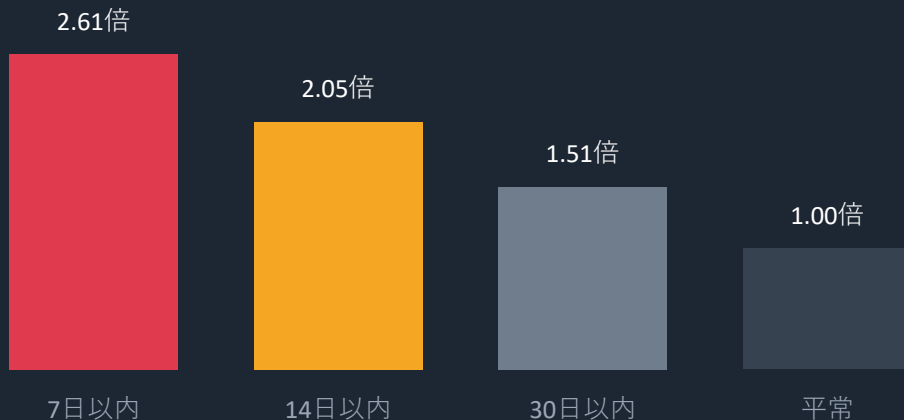
注記：通常の目撃記録はクマの様子のみが記されるため、人間の行動記録はバイアスにより倍率が過大に出る傾向がある。ただし、岩手県の特化データを除外しても順位構造（山菜採り・農作業の高リスク）は揺るがない。

示唆 屋外作業（山菜採り・農作業）への注意喚起と装備指導が、人身被害低減の最短経路となる。

06 時間的減衰：「一度出た場所」の短期リスク

予測モデルがなくとも、「出沒があった場所には少なくとも1週間近づかない」というルールが最も有効な即応策となる。

出沒地点での再出沒リスク倍率（平常時＝1.0）



出沒から7日以内

2.61倍

直後の再出沒率 26.2% / 平常 10.0%

14日以内 2.05倍 / 30日以内 1.51倍

示唆

全地点の55%は「1件のみ」の出沒。特定危険箇所の回避だけでは遭遇の半数を防げないため、発生直後の短期封鎖が鍵となる。

07 誘引物カレンダー：接触機会の排除

人里への接近要因は月ごとに明確に切り替わる。10月のピークでは「柿」への執着が圧倒的な誘引トリガーとなる。

8月～9月（夏季）

その他果樹 687件

農作物 313件

養蜂 232件

10月～11月（秋季ピーク）

柿 3,475件

栗 854件

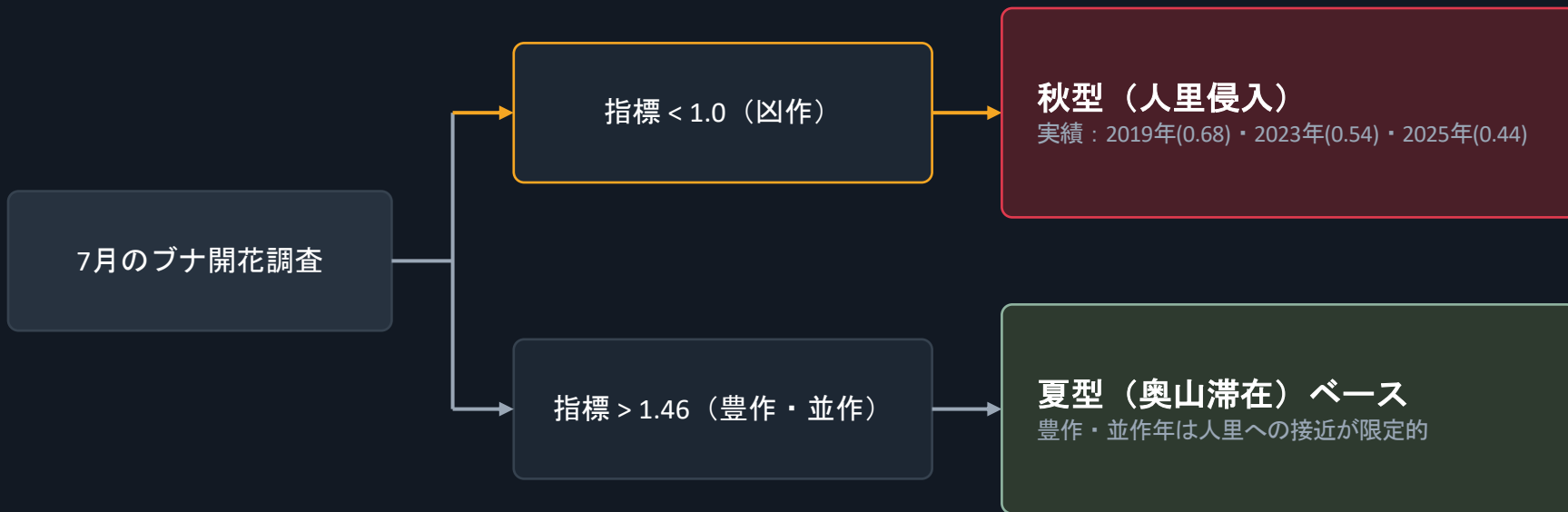
生ゴミ・堆肥 166件

家畜・ペット 68件

示唆 10月を待たず、秋季ピーク前に柿等の未収穫果樹を徹底的に早期撤去することが最大の防御策。

08 予測モデル：ブナ開花指数による「型の事前予測」

東北5県の「ブナ開花指数」は、10月の人里侵入リスクを2～3ヶ月前に察知する強力な先行指標である（的中率86％）。



示唆 過去の検証では、凶作年と並・豊作年の間で指数の重なり（ノイズ）は確認されていない。

09 2026年10月のフォーキャスト（予測と限界）

2026年 ブナ開花指数

3.90

→ 秋型にはならない見込み（凶作県 0／5）

10月予測件数

3,879件

全年平均モデル適用

モデル的中率 6／7（86%）



注意：「秋型ではない＝油断してよい」ではない

型の判定が未確定な段階での全年平均モデルは、誤差が平均121%と極めて大きい。2020年は開花指数2.04（並作）であったにもかかわらず、局所的に秋型の挙動（比率1.46）を見せた唯一の「外れ年」である。予測値の過信は禁物。

10 結論：データに基づく3つのアクション



【投資】境界への集中

奥山へのリソース投下を見直し、出没確率が最も高い「森林率40～60%のモザイク地帯」の藪刈りおよび緩衝帯整備に予算と人員を集中させる。



【防衛】10月ピーク前の誘引物遮断

被害リスクが突出して高い「農地」において、柿などの未収穫果樹や生ゴミを、最大トリガーとなる10月以前に徹底的に撤去・管理する。



【行動】7日間の立入制限ルールの徹底

遭遇の55%は単発地点。出没が確認された直後の地点はリスクが2.61倍に跳ね上がるため、「少なくとも7日間は対象エリアへの立ち入りを厳格に制限する」運用を即時徹底する。

本分析について

獣医工学ラボ

リサーチコーディネート株式会社

KumaWatch（くまウォッチ）に蓄積された出没・人身被害データを、空間・時間・行動・誘引物・先行指標の5軸で分析しました。自治体・事業者向けに、地域を限定したカスタム分析や、定期レポートの提供が可能です。

- 地域別リスクマップ
- 季節・誘引物別の対策カレンダー
- 出没直後の即応ルール設計
- 自治体向け定期レポート

<https://kuma-watch.jp>

